

第6次総合振興計画「後期計画」での位置付け

※一部「後期計画」の記述を引用

村はこれまで、「農」の再生へ向けて、「生きがい農業」「なりわい農業」など、「農」に取り組む方それぞれの段階に合わせた事業や、ステップアップを推進する農業施策を展開してきました。およそ6年に及ぶ全村避難の後の営農再開は容易なことではありませんでしたが、多くの村民の皆さんに事業をご活用いただき、農業法人の新設や新規参入、個別農家の営農再開や新規就農など、多様な担い手による「農」の取り組みが一步一步進んできました。

村は、今後も一人ひとりの活躍の場を広げると共に、「までいブランド」の確立・拡大を目指す取り組みを通して、「農」に関わる皆さんが希望と誇りを持って働ける環境づくりを推進したいと考えています。また、デジタル技術の導入による生産性の向上も促進していきます。

取り組みの例

- 風評被害を払拭すると共に、飯館の牛やあぶくまもち等をはじめとする飯館村産品の「までいブランド」確立・拡大に努めます。
- 農畜産物等の高品質化・高付加価値化を図ると共に、新たなニーズに応える品目の生産を促進します。
- 飯館村産品の販路拡大を図るとともに、積極的なPRや情報発信に努めます。

震災と原発事故がもたらした困難を乗り越え、コロナ禍に耐えて、現在の飯館村を彩っている産品、商品は、村民の皆さんの努力が形となった「たからもの」。令和5年度は行政においても民間においても、さまざまな形でPRイベントが開催されました。令和6年度はその動きをより豊かに広げ、生産拡大や販路の開拓につながるよう生産者の支援を続けていきます。

震災前の「までいブランド」

震災前、平成19年度～21年度に進められた「いたてまでいブランド確立事業」では、純農村の魅力と、までいに育てた農作物の品質の高さを地域資源として打ち出そうという試みでした。飯館牛のブランド力を高めいっそうの消費拡大を図ること、もち米の特性を生かしたもち加工・米粉加工、さらには米粉パンの開発などを行うこと、ブルーベリー・タラの芽・ふき・銀杏・梅・ジャガイモ・行者ニンニクなどの振興作物から新たな名産品を開発することなどが計画されていました。また、物産展などにも出展して消費地と交流し、販路の拡大も推進しました。

さらに村は、「いたて地産地消ブランド推進協議会」を立ち上げ、「までいマーク」を商標登録。商標掲示の認定を通して、までいブランドの価値を高めました。

1 産業・観光・移住分野

基本方針
どこに暮らしていても
参加して楽しい
新しい豊かさを感じる村へ

村に想いを寄せる方々との新しい
関わり合いや村民の新しい暮らし
を尊重し、新しい豊かさを感じる産
業を作り出す村を目指します。

施策 I
産業 一人ひとりの関わり合いで力を
合わせ拡大させるまでいブランド
観光 資源にひと手間加えて築く観光以
上移住未満の関係
移住 モノや心を分かち合い、ふんわり
やっこく迎える村

1 農畜産業の担い手の確保
2 農畜産業の環境づくり
3 までいブランドの確立・拡大
4 里山の再生と林業の活性化

1 商工業の振興

1 戦略的な観光への取り組み
2 いたてファンの拡大

1 移住・定住の促進
2 交流人口の拡大

震災前、第5次総合振興計画の下で進められた事業のポスター。



育てよう
までい
ブランド

一人ひとりの関わり合いで
力を合わせ拡大させる
までいブランド

力を合わせて、新しい「までいブランド」を育てていきましょう

令和6年度が始まりました。新年度の事業は、第6次総合振興計画「後期計画」の4つの基本方針を柱に、また、5つの政策と組み合わせる形で展開します（詳しくは本紙P67をご覧ください）。この基本方針の「どこにいても参加して楽しい新しい豊かさを感じる村へ」の「施策I 産業」のテーマに掲げているのが、「一人ひとりの関わり合いで力を合わせ拡大させるまでいブランド」です。

震災前の第5次総合振興計画の下で取り組んでいた「いたてまでいブランド」の事業では、村民が心を込めて育てた農産品を認証し、「までいマーク」の商標を付与していましたが（詳しくは次ページで）。しかしこの取り組みは、全村避難によって中断されてしまいました。

村は、避難中から準備を

進め、避難指示解除の直後から、村民の皆さんと共に、一歩一歩農業の再生に取り組んできました。そして、村民の皆さんの生産活動と並行して、産品の魅力の発信や、新たな特産品の開発を行い、相互の進展に努めてきました。

こうした挑戦を続ける中で、質の高い野菜や花がつけられ、おいしい米や蕎麦がつけられ、飯館産の牛肉が新たな形で提供され、農産品を生かしたさまざまな商品も誕生して村を彩り始めています。

震災を乗り越えてきた産品、新たに生まれた産品、それらを活用したさまざまなアイテムを、大切に育んでいきましょう。「ふるさとの担い手」一人ひとりの取り組みが、賑わいをもたらし、新しい「までいブランド」を形づくっていきます。